

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

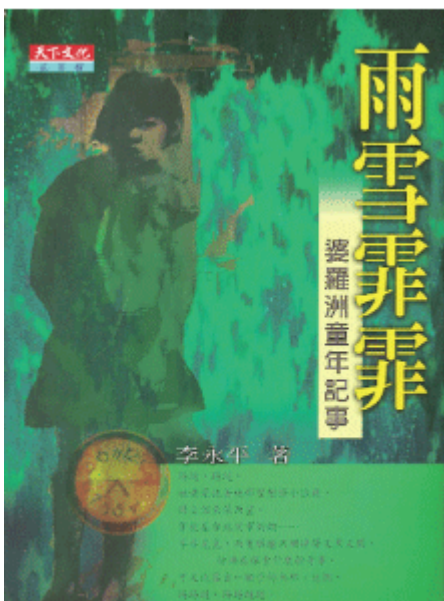
巨星墜つ。あるボルネオ作家の死

舛谷鋭 (立教大学観光学部教授)

「李永平が死んだ」と言って、どのくらいの日本人、あるいはマレーシア人が反応するだろう。

ラテンアメリカなどのポストコロニアル文学、国際移民状況を映したディアスポラ文学など世界文学の潮流の中で、マレーシア発と言って良い Sinophone (華語系) は、「台湾熱帯文学シリーズ」(人文書院)として和訳されているが、劈頭を飾るのは李永平の『吉陵鎮ものがたり』だった。マレーシア出身で台湾在住の Sinophone 作家は小説に限らず、映画監督の蔡明亮もその一人だが、故郷ボルネオの原風景は彼らの創作の尽きせぬ源泉と言えよう。

——その頃我が家は、南洋のボルネオという島に住み、イギリス植民地下で「サラワク」と呼ばれている場所で、8人兄弟は首都クチンの学校に上がりました。——『雨雪しとしと—ボルネオ幼年記—』より



李永平著『雨雪しとしと』(2002年)。(筆者撮影)

1999年に『亞洲週刊』が発表した「中国語小説100選」は未だによく引かれるブックリストだが、トップ3の魯迅、沈從文、老舎といった著名作家に比べ、40位の李永平の名は異彩を放つ。英領時代のボルネオ・クチン(現マレーシア・サラワク州)で47年に生まれた「南洋からの流れ者」は、20才で華僑留学生として台湾大学に入学して

モダニズムの洗礼を受け、米国で研究者となり、台湾で教職を得る。李は後年インタビューの中で、「マレーシアは嫌いだ。大英帝国がマレー半島の政治屋と勝手に拵えた国で、とりあえずインドネシアに対抗したいがため、高校生の頃、わけがわからないうちに英国からマレーシア国民にされたが、全く受入れられず、怒りが募るばかりだった」と述べている。

もう一人、ボルネオ出身の台湾在住作家に張貴興がいるが、2人のボルネオ台湾作家の比較は、『吉陵鎮も

のがたり』の訳者の一人である及川茜によって試みられている。2人のマジックリアリストたちは、共に故郷ボルネオを、あたかも彼らの創作言語の文化的中心である中国にあるかもしれない、想像上の郷鎮として描く。

『雨雪しとしと』(2002年)は台北の浅草、猥雑極まりない華西街が舞台だ。冒頭の献辞に「ボルネオの幼年時代の思い出を、台北の少女に伝える」とあるように、前作『海東青』(1992年)と同じ7才の少女・朱鴿を聞き手に、主人公「李永平」がボルネオでの幼年時代を、華人にとって帰郷先とも言える中華世界と対照的に語る10編の物語からなる連作中編である。初恋、愛犬、妹など一見日常的なテーマが相互に絡み合う。7番目の物語「遊撃隊員の死」は、英領マラヤの反植民地左翼運動が題材だが、マレー半島だけでなくボルネオにとっても、日本植民地時代の苦難に続く突出した記憶の緯糸は、反共政策と悲惨な日常であることは、近年陸続と発表される華人文学の緒作からも明白だ。

そしてここで、故郷ボルネオについての李の嫌悪感を思い出してみよう。何とも弱く、翻弄され続けた土地であることか。歴史を遡っても、ブルネイ王国、白人王ブルック、日本植民地が縊られるばかりで、ボルネオ現地の意思は感じられない。まるで中国と英国に翻弄された香港や、日本と中国、米国に弄ばれた沖縄のように。

第二次大戦後生まれの李にとって、血の記憶は肅正と結びついている。それは『吉陵鎮ものがたり』、『海東青』、『雨雪しとしと』、『大河尽頭』の後、『朱鴿ものがたり』(2015年)へと続く李山脈で繰り返されるモチーフでもあり、一刻も早い和訳出版が待たれる。2017年9月に享年70で逝去したマレーシア華人文学の巨星を、今に至るマレーシアの歴史と多文化に関心を持つ日本人として悼みたい。

< 筆者紹介 >

1964年東京生まれ。早稲田大学助手を経て、現在、立教大学観光学部教授。マラヤ大学、南洋理工大学客員を歴任。マレーシア華人文学(馬華文学)および観光文学研究を通じ、東南アジア華人社会に広く人脈を持つ。